

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：55401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01660

研究課題名(和文) 高等専門学校の特徴を生かした保健体育教育のカリキュラム開発とモデルの創出

研究課題名(英文) Curriculum development and creation of a model for health and physical education utilizing the characteristics of technical colleges

研究代表者

佐賀野 健 (Sagano, Takeshi)

呉工業高等専門学校・人文社会系分野・教授

研究者番号：80311075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：高専における体育授業では球技スポーツやニュースポーツを多用しながら、そこから得られる技能や他者との関係性を主な学習内容としていた。そして、学校内外の人的・物的資源を活用しながら、高専生に他者理解などを含めた多様な経験を5年間かけて継続的に学習できるという特色を持った授業が実施されていた。高専体育教員は、主に大学院を修了しており、新規性や独自性、研究という要素をもとに授業を工夫し、学生の運動やスポーツへの愛好性や社会的スキルの育成を狙った授業、各教員の専門性を生かした体育授業を実施していることが明らかになった。以上の研究成果から、高専の特色を生かした体育カリキュラムの基本的な考え方を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

独立行政法人国立高等専門学校機構は、すべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容(モデルコアカリキュラム)を作成している。現在、その中で保健体育教育は対象になっていないが、将来的には検討が必要になると考えられる。本研究成果はそのときの先行資料としての価値が高い。また、今後の高専における授業改善に役立つ高専のモデルとなる新しい保健体育カリキュラムや授業内容を提案することができる。さらには、今後の大学工学系において職業教育・キャリア教育を実践する上での保健体育教育の在り方への示唆を得られると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Physical education classes at colleges of technology used a lot of ball sports and new sports, and the main learning contents were the skills acquired through these sports and the relationships with others. The classes were characterized by their ability to provide students with a variety of experiences, including understanding of others, over the course of five years, while utilizing human and material resources both inside and outside the school. The physical education teachers of technical colleges have mainly completed graduate school, and it became clear that they devise classes based on novelty, originality, and research elements, conduct classes aimed at fostering students' love of exercise and sports and social skills, and conduct physical education classes utilizing the expertise of each teacher. Based on the above research results, we proposed a basic concept for a physical education curriculum that makes the most of the characteristics of technical colleges.

研究分野：保健体育科教育学

キーワード：保健体育科教育 高等専門学校

## 1. 研究開始当初の背景

高等専門学校(以下、高専とする)は、我が国の高度経済成長期に産業界からの要請もあって、実践的技術者を育成するために1962年(昭和37年)に初めて設立された。高度な職業教育を行う5年間一貫の教育機関である。制度発足以来、高い専門的技術を持った卒業生を送り出し、産業界から高い評価を受けている。これまで、高専から約40万人の技術者が育成されてきている。その数は技術者全体の約10%に相当する。技術者教育の成功事例として知られる高専教育は、職業教育の観点から論じられることはあっても、体力の向上や公正・責任感等の態度を育てる保健体育教育との関連・観点から論じられることはなかった。

高専は、中学校の卒業生を対象にして、5年間の一貫教育によって「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成する」(学校教育法第70条の2)ことを目的に設立されている。理系の学科を主体とする高専には女子学生の比率が低く、保健体育授業(特に実技)の行われ方にも特段の配慮が必要とされる。

多くの高専において、保健体育は一般教養科目として位置づけられている。高専での保健体育は、高等学校のように、学習指導要領の適用を受けないという特徴があり、そのカリキュラムや授業形態等は各高専に委ねられている。したがって、各高専での保健体育の実践は様々な状況であるにもかかわらず、その授業実践の報告や分析、教育成果の検討などは、ほとんどなされていないのが現状である。

このことに加え、実践的技術者育成の役割を担う高専独自のカリキュラムの中で、保健体育の位置づけは必ずしも明確にされていない。そのため、保健体育科において卒業時に学生が達成すべき目標は不透明であり、高専全体の教育理念における保健体育の位置づけや、高専の特徴に適した保健体育教育カリキュラムの開発が急務である。

## 2. 研究の目的

本研究では、全国の高専において保健体育がどのように実施されているのか、授業カリキュラム、授業形態、教育内容について、またこれまでの教育成果を明らかにした。さらに、全国の高専保健体育教員へのアンケート調査や聞き取り調査を実施し、各高専の実態や課題について分析を行う中で、先進的な授業を行っている高専、特徴のある高専について詳細な実態調査を行った。これらの現状分析や実態調査を通して、高専の特色を生かした保健体育教育のカリキュラム開発とモデルを創出することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 高専における体育教育に関する先行研究の整理

論文検索サイトの「CiNii Articles」、「J-STAGE」、「国立国会図書館サーチ」において、「高等専門学校(スペース) 体育授業」または、「高専(スペース) 体育授業」で検索し、該当した研究のうち、雑誌や紀要に掲載されている論文を対象とし、高専における体育教育に関する先行研究の整理を行った。

### (2) 高専における体育授業の現状を明らかにするための全国の高専体育教員への質問紙調査

現在の高専で実施されている体育授業について調査、分析するために、日本全国の高専体育教員への質問紙調査を実施した。質問紙の調査項目の設定に関しては、高専のMCC(国立高等専門学校機構、2017)、学校現場の教員が体育の授業をどのように捉えているかを研究した橋本ほか(2014)や、中国地方の高専の体育授業の特色について研究した柴山ほか(2019)を参考にして、高専の体育教員が体育授業についてどのように考えているかを調査、分析できるようにした。日本全国62校の高専の体育教員133名を対象とし、質問紙を2018年10月に各高専へ郵送した。2019年1月までに返信のあった54校の高専113名(回収率85.0%)分を分析した。なお、統計的有意差の確認では対応のないt検定を実施し、全ての有意水準は5%未満とした。

### (3) 高専の体育授業の特色に関する調査

中国地方の高専における体育の現状を把握するためにシラバスの分析を行った。現在、我が国の高専はWeb上でシラバスを公開しており、各校の体育、スポーツに係る授業のシラバスのうち、「到達目標」に注目し、テキストマイニングによって頻出語句の抽出と、学年との関係について分析した。また、その他にも「授業計画」の項目にも着目し、各校で実施されているスポーツ種目等についても調査した。次に、中国地方の高専体育教員へ特色ある体育授業の実施状況についてのヒアリング調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 高専における体育教育に関する先行研究の整理

高専の体育授業に関する先行研究は、授業研究(実証的研究)と基礎的研究(他の専門科学的方法による研究、評価法の研究、学問論)、授業づくり研究(カリキュラム論や方法論等の理論的研究)がバランスよく蓄積されてきたことが明らかになった。

これまでの高専における体育教育については、高専が設立された1960年代当初は高等学校

学習指導要領からの影響を多分に受けつつも、それ以降は高校や大学とは違った体育教育を模索し始め、現在では高専の教育全体の質保証を提示するモデルコアカリキュラム(国立高等専門学校機構, 2017)をもとに、更に自由な発想で体育科教育を考えるような流れとなっている。そのような流れの中でも、健康と体力の向上と生涯スポーツへとつながる体育科教育という一貫した考え方が存在し、それを具現化するために、高専教員は自由な発想や研究者意識のもとに、さまざまな教育を展開してきたことが明らかになった。

(2) 高専における体育授業の現状を明らかにするための高専体育教員への質問紙調査

1) 高専体育教員の属性について

女性教員が少ないこと、大半の教員が修士以上の学位を保有していること、保健体育の教員免許を保持していない教員が在籍していることが明らかになった。

2) 高専体育のカリキュラムや目的について

表1 カリキュラム策定時の参考事項

回答項目	(%)
学生の現状の体力や運動能力	79.6
学校の施設	79.6
学校の行事	13.3
モデルコアカリキュラム	22.1
高等学校学習指導要領	28.3

表2 授業の目的に関する回答割合

回答項目	(%)
体力・運動技能の向上	76.1
生涯スポーツにつながる興味や関心づけ	96.9
礼儀やしつけ, 集団行動	67.3
ストレス発散	62.8

表1に体育のカリキュラム策定時に参考にする事項についての回答割合について示した。「学生の現状の体力や運動能力」、「学校の施設」については、大半の教員が目の前の学生や生徒の現状、学校の施設に即した体育のカリキュラム策定を行っていることが分かる。

表2は体育授業の目的に関する高専教員の回答割合である。まず、「体力・運動技能の向上」と、「生涯スポーツにつながる興味や関心づけ」への回答割合は、先行研究の高校データと変わらなかった。「礼儀やしつけ, 集団行動」については約70%であり、高専においての学生指導はその基準となる規則等が高校に比べると緩やかであることが要因の1つとして挙げられる。また、高等学校学習指導要領のように集団行動が体育授業で適切に実施されることと示されるようなものが無いことが、高専の体育教員の「礼儀やしつけ, 集団行動」といった回答への割合を低くしていると推測された。「ストレス発散」については、先行研究より20%以上高くなる結果となった。高専は高校と比べて留年率が高いという実態もあり、高専生が日々の学校生活で高いストレスを感じているため、それを授業で少しでも緩和させようという体育教員の考えが推察された。以上のように表2の分析と考察を通して、高専における体育授業の目的は、一般的な高校と変わらない面もあるが、高専の学生が抱える精神的な課題などが、高校とは違った側面を創り出している可能性が示唆された。

3) 高専の体育授業での工夫について

表3 授業実施上の工夫についての大学卒群と大学院修了群の回答結果の比較

質問項目	大学卒群		大学院修了群		有意水準
	平均	SD	平均	SD	
学生が取り組みやすい教材を活用	3.32	0.47	3.45	0.54	
学生が未経験の授業を実施	2.11	0.62	2.54	0.78	**
高校の授業を参考	2.61	0.56	2.54	0.82	
大学の授業を参考	2.29	0.59	2.55	0.80	
高専の特色ある授業の実施	2.18	0.76	2.52	0.86	*
創造性を育む授業の実施	2.54	0.57	2.53	0.68	
他教科との連携	1.61	0.62	1.85	0.79	
企業との連携	1.14	0.35	1.13	0.34	
地域との連携	1.18	0.38	1.48	0.95	
研究費の活用	2.36	0.85	2.73	0.86	*
体育以外の施設等を活用	1.46	0.63	1.53	0.71	

(\*p<0.05, \*\*p<0.01 t-test)

表4 授業実施上の工夫についてのMCC参考群とMCC非参考群の回答結果の比較

質問項目	MCC参考群		MCC非参考群		有意水準
	平均	SD	平均	SD	
学生が取り組みやすい教材を活用	3.42	0.52	3.42	0.49	
学生が未経験の授業を実施	2.67	0.77	2.42	0.69	
高校の授業を参考	2.42	0.82	2.58	0.64	
大学の授業を参考	2.63	0.81	2.44	0.70	
高専の特色ある授業の実施	2.42	0.87	2.48	0.81	
創造性を育む授業の実施	2.88	0.67	2.42	0.53	**
他教科との連携	2.00	0.73	1.71	0.87	
企業との連携	1.17	0.30	1.10	0.37	
地域との連携	1.42	0.92	1.42	0.76	
研究費の活用	2.71	0.84	2.67	0.89	
体育以外の施設等を活用	1.54	0.71	1.50	0.64	

(\*p<0.05, \*\*p<0.01 t-test)

表3は体育授業の実施上の工夫についての回答結果の平均を、大学卒群と大学院修了群で比較したものである。点数が高いほど、質問項目に対して肯定的な回答を示している。大半の回答において、大学院修了群のほうが高い値を示しており、「学生が未経験の授業を実施」、「高専独

自の授業の実施」、「研究費の活用」という3項目については、統計的にも有意であることが確認された。特にこの3項目の回答結果の違いから見てくるものは、回答者の大学院での経験が多分に影響しているのではないかということである。わが国の大学院で学位を取得する際、修士論文や博士論文の執筆が必須の条件となってくるが、これらの論文にはオリジナリティや新規性という要素が必要となってくる。そのような回答者自身の研究や論文執筆での経験から、大学院修了群は体育授業に関しても学生たちが今まで経験したことの無い授業内容を設定したり、高専独自の体育授業を実施したり、そのために研究費を活用して研究の一環としていることが考えられる。大学院修了の高専教員は、そのような研究的な学びからの影響を受けて授業実施の工夫を行っていると考えられた。

さらに、表1で示したカリキュラム策定時に参考とする事項の回答をもとに、回答者をMCC参考群とMCC非参考群で比較した結果を表4に示す。大半の質問項目では両群の違いを認めることはできなかったが、「創造性を育む授業の実施」という質問項目のみで、MCC参考群のほうが有意に高い結果となった。これは、MCCにおいて体育科は技術者が備えるべき分野横断的能力のうち態度・志向性(人間力)を育成する教科として位置づけられている。そして、その分野横断的能力の到達レベルは6段階に設定されており、その最高レベルが創造レベルとされていることや、そもそも高専は創造性あふれる技術者の育成を掲げている学校(国立高等専門学校機構, 2018)だけに、その教育の質保証を示したMCCを参考に体育のカリキュラムや授業を構築している教員は、創造性を重要なキーワードとして扱っていることが分かる。更に言えば、高専独自の体育授業を考えたとき、創造性というキーワードは外すことはできない。

以上の表3と表4の考察から、高専における体育授業では新規性やオリジナリティ、研究、創造性という要素で構成されていることが示唆された。

### (3) 高専の体育授業の特色に関する調査

#### 1) シラバス分析

表5 到達目標における頻出語句

語句	出現回数	順位
ゲーム	43	1
技能	42	2
運動	37	3
自分	30	4
理解	30	4
スポーツ	27	6
行動	26	7
自ら	26	7
集団	23	9
他者	23	9
実践	23	9

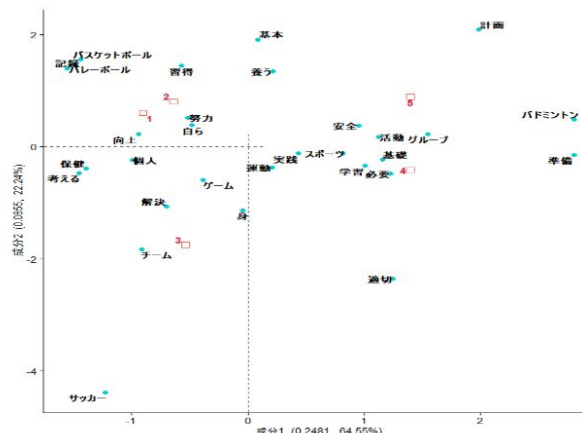


図1 到達目標頻出語句と学年との対応分析

表5にシラバスの到達目標の項目で頻出している語句について上位10位までを示す。「ゲーム」、「技能」、「運動」、「自分」、「理解」、「スポーツ」、「行動」、「自ら」、「集団」、「他者」、「実践」という語句が上位を占めた。「ゲーム」という語句が最上位にきていることから、大半の授業において球技が選択され、その中でゲームが実施されていることが分かる。次に、「技能」という語句がくることから、体育の授業における重要な学習内容は技能学習であるということが分かる。そして、「自分」や「自ら」、「実践」という語句が頻出していることから、体育の授業において学習者自身の体力や技能の現状把握、それらを主体的に向上させることに重要性を見出していることも考えられた。

続いて頻出語句の使用と学年との対応分析について図1に示す。グラフ内の付近の数字は学年を表しており、その近くの語句ほど、その学年で使用されていることが分かる。ここでは、1~3年までの低学年と4~5年の高学年で違いが認められた。低学年では、「努力」、「習得」、「向上」、「考える」、「解決」、「個人」、「チーム」などの体育を学習するうえで重要な学習内容や意味についての語句が多いが、高学年になると「グループ」、「活動」、「準備」、「安全」、「計画」などの体育を学習するうえで重要となってくる学習方法に関する語句が多くなっている。このことから、高専の体育における到達目標は、低学年のうちは体育学習の内容や意味をしっかり理解し、高学年になると、それを生かしたうえでの学習の方法を学ぶことに移行していることが分かる。

表6に中国地方における8高専の体育授業で実施されている種目等について示す。まず、新体力テストやスポーツテストが最上位となり、8高専のうちの7高専で実施されている。これは学

表 6 中国地方の高専の体育授業での実施種目

スポーツ種目等	実施時間数	実施校数
新体力テスト, スポーツテスト	24	7
水泳	16	6
バスケットボール	15	7
バレーボール	15	7
サッカー	14	8
陸上競技	13	5
ニュースポーツ	12	4
バドミントン	8	5
持久走・ロードレース	7	3
ソフトボール	7	6
学生発案型授業・選択体育・選択種目	6	3
体づくり運動	5	3
卓球	5	4
テニス	5	3
ゴルフ	4	3
器械運動	2	2

生の体力や健康状態, 生活習慣を把握するために極めて有効な手段であり, また, 日本国内において 16 歳から 20 歳までの新体力テスト, スポーツテストを実施できるのは高専だけということもあり, 貴重な研究資料となることから各高専で実施されていると考えられる。次に上位となった水泳については, 実施している 6 高専の体育教員がその学習内容を重視していることがうかがえる。昨今, 授業中やクラブ活動中での死亡事故が報道されたり, プールの維持費がかさんだりすることから, 水泳を廃止する学校が増え始めており, プールの設置数で見ても平成 20 年度から平成 27 年度にかけて高等学校では約 10%, 大学・高専では約 15% の減少率となっている。しかし, 中国地方の高専においても減少率は 25% ながら, 現状では実施数で上位にきているということは, 高専における水泳の授業は将来的には特色ある教育になる可能性があると考えられた。

## 2) ヒアリング内容の分析

ヒアリングでの質問内容は, 「勤務する高専で特色ある授業を実施しているか(実施している場合はその具体的な内容)」、「どのような目的で特色ある授業を実施しているのか」、「特色ある授業を実施するにあたり, どのように準備したのか」である。その結果, 50% の高専で特色ある体育授業を実施しているという回答があった。具体的な内容としてはクルージング, アウトドア実習, マリンスポーツ, 地域住民とのグラウンドゴルフ交流, 海洋体験実習, 妊婦・障がい者体験, 電動車いすサッカーなどであった。

高専は充実した施設や設備, 専門的な教員が勤務していることから, 「学校内外で垣根を超えた連携や協力をする事で, そこにあるさまざまな教育資源を活用」することができる。そして, 教員は研究者を兼ねているため一定の研究費を体育授業に活用することも可能で, その点からも教材等の新規購入もスムーズに行うことができる。最後に, 授業内容についても高校のように学習指導要領に縛られず, 教員の専門性を生かすことができるため, 「多種多様な学習内容の提供」が保障され得る環境にある。これらが中国地方における高専の特色ある体育授業の苗床となっていることが考えられた。

以上の研究成果から, 高専における体育授業カリキュラムを考える上での基本的な考え方を次に示す。

- ・教員は学生が安心して創造性教育に取り組めるように, 物理的, 精神的に安心できる体育授業の環境整備に努める。
- ・既存のスポーツ種目に加えて, ニュースポーツやアダプテッドスポーツを活用しながら, 新しいスポーツを考案する等の創造性が実現できるような内容も含めるように努める。
- ・自分たちが考えたルールや競技方法に適したスポーツ器具や施設を選択し使えることや, 道具の活用や工夫を自主的に考案し, 実践できるような教育内容とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柴山慧・佐賀野健・齊藤一彦	4. 巻 第44巻（4号）
2. 論文標題 高等専門学校における体育授業の現状と課題に関する教員の意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山慧・橋本真・趙月輝・寺下貴展	4. 巻 第44巻
2. 論文標題 離島におけるスポーツ環境について - H 県O 島のA 高専卓球部に焦点をあてて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田昌太郎・橋本真・柴山慧	4. 巻 第43号
2. 論文標題 「ポストコロナ社会」における保健体育の意義や課題に関する調査研究：A 県の商船高専を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 53 - 65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山慧	4. 巻 第1号
2. 論文標題 高等専門学校における創造性を育成する体育授業の実践研究 教科の特色を生かして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」	6. 最初と最後の頁 568 - 577
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 幸田三広・行平真也・北哲也・南雅樹・一箭フェルナンドヒロシ・伊藤耕作・佐賀野健・荒木祥一・柴山慧・宇野直士	4. 巻 第24巻 第2号
2. 論文標題 高専入学者の部活動に対する意識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本高専学会誌	6. 最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山慧・橋本真・高見健太郎・大和田寛	4. 巻 第42号
2. 論文標題 わが国の体育授業における創造性教育について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 7-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山慧	4. 巻 10月号
2. 論文標題 第54回全国高等専門学校体育大会 大会REPORT	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 陸上競技マガジン	6. 最初と最後の頁 164-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山慧・橋本真・荒木祥一・佐賀野健	4. 巻 第24巻
2. 論文標題 中国地方の高専における体育授業の分析 - 高専の特色ある体育授業に向けて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本高専学会誌	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山慧・橋本真・南雅樹・佐賀野健	4. 巻 第41号
2. 論文標題 これまでの高専における体育科教育の研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島商船高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木祥一	4. 巻 第1巻
2. 論文標題 中国地区高専大会 第50回記念大会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高専体育大会五十年の歩み	6. 最初と最後の頁 159-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐賀野健	4. 巻 第1巻
2. 論文標題 中国地区高専大会の歩み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高専体育大会五十年の歩み	6. 最初と最後の頁 161-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 丸山啓史・佐賀野健・柴山慧・一箭フェルナンドヒロシ・荒木祥一
2. 発表標題 ダイナミックストレッチの実践を主体とした体育遠隔授業の試み 自宅内小空間での実施を前提として
3. 学会等名 第4回 高専×地域 研究交流会 in 広島商船高専
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 趙月輝・松本ミユ・濱本想子・橋本真・柴山慧
2. 発表標題 国立高専における保健授業の現状と課題
3. 学会等名 第26回 高専シンポジウムオンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴山慧・下田旭美・橋本真
2. 発表標題 英語科と保健体育科の協働によるCLIL学習の実践と成果
3. 学会等名 第4回高専リベラルアーツ教育研究交流会・実践発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Shibayama,K, Matsumoto,Y, Saito,K
2. 発表標題 Examining the possibilities for Creativity Education in Physical Education Lessons in Japan
3. 学会等名 25th European College of Sport Science
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴山慧・齊藤一彦
2. 発表標題 A study on creativity in physical education lessons in Japan
3. 学会等名 The 2020 YOKOHAMA Sport Conference
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴山慧
2. 発表標題 高専における創造性を育成する体育授業の検討
3. 学会等名 日本高専学会第26回年会講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋本真・柴山慧・寺下貴展・小田愛斗
2. 発表標題 大崎上島における外国人居住者の地域交流に関する研究調査 - バスケットボール競技、アンケート調査を通じて -
3. 学会等名 国際健康・スポーツ分科会第18回大会報告
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴山慧
2. 発表標題 高等専門学校の体育授業における創造性教育の検討 質的分析研究法を用いて
3. 学会等名 日本創造学会 西日本支部 第3回研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴山慧・橋本真
2. 発表標題 広島商船高専における オンライン保健体育授業
3. 学会等名 達セミ2020第2回オンライン大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柴山慧・橋本真
2. 発表標題 保健体育科の授業における地域課題解決型学習の実践と成果について - 地域愛着感情も含めた成果の検討 -
3. 学会等名 第70回日本体育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei SHIBAYAMA, Shin HASHIMOTO
2. 発表標題 The development for solving community problems learning in health and physical education lesson
3. 学会等名 TAFISA World Congress 2019, Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴山慧
2. 発表標題 体育授業における創造性教育の基礎的研究 - 先行研究からの考察を中心に -
3. 学会等名 第56回大阪体育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松田雄大・柴山慧・藤島廉
2. 発表標題 高専の体育におけるフライングディスクに関する授業実践研究 - 質問紙調査の結果を中心に -
3. 学会等名 第56回大阪体育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋本真・柴山慧
2. 発表標題 高等専門学校における体育授業の現状についての基礎的研究 - 体育教員の授業観をもとに -
3. 学会等名 第56回大阪体育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒木祥一
2. 発表標題 高等専門学校における教養教育としての保健体育の役割
3. 学会等名 高専リベラルアーツ教育研究交流会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	荒木 祥一  (Araki Shoichi)  (50321477)	津山工業高等専門学校・その他部局等・教授   (55301)	
研究分担者	丸山 啓史  (Maruyama Keishi)  (70708651)	呉工業高等専門学校・人文社会系分野・准教授   (55401)	
研究分担者	柴山 慧  (Shibayama Kei)  (50735652)	広島商船高等専門学校・その他部局等・准教授   (55402)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	齊藤 一彦  (Saito Kazuhiko)  (60413845)	広島大学・教育学部・教授    (15401)	
連携研究者	崎田 嘉寛  (Sakita Yoshihiro)  (60390275)	北海道大学・教育学部・准教授    (10101)	
連携研究者	岩田 昌太郎  (Iwata Shotaro)  (50433090)	広島大学・教育学部・准教授    (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関